

財団設立8周年を迎えて

医学研究のグローバル化が急速に進んでいます。特に、臨床医学研究における中国の躍進は刮目すべきものがあり、New Engl J Med やLancet などの臨床医学雑誌に掲載される中国発の臨床研究論文数は、わが国のそれを上まわるようになっていきます。13億人といわれる中国の人口は臨床研究を安定的に遂行する決定的に有利な条件と思われます。

わが国においては、小児臨床研究のグローバル化に向けて、より個性的な取り組み方を求める必要があります。少子化の解明もその一つであり、小児科医は、アウトカムを明確にした疫学的研究を導入する責務を担っています。医療政策やプライマリケアに対する関心を持つ小児科医の支援など、当財団の果たすべき役割も一層重要なものになると自覚いたしております。

小児医学研究において、特に重要な問題の一つは子どものこころの健康があります。当財団は、故鴨下重彦先生のご遺志を継いで、こころの病に対する研究支援を当初から続けております。皆様の一層のご支援をお願いいたします。



常務理事

松尾 宣武

平成27年度研究助成金・海外留学フェロシップ等募集要項／海外留学体験記 (詳細2～3面)

知っておきたい小児の感染症ABC!! 報告書

(別冊)

◆ 特別寄稿

市民公開講座「知っておきたい小児の感染症ABC!!」を企画して

慶應義塾大学医学部
感染症学教室教授

岩田 敏

平成27年9月6日(日)に、練馬区立区民・産業プラザCoconeri(ココネリ)ホールにおいて、「知っておきたい小児の感染症ABC!!」というテーマで、市民公開講座を開催いたしました。感染症は、小児が医療機関を受診する理由として最も頻度の高い疾患であり、保護者や保育・教育現場での関心がもっとも高い領域であると考えられます。今回は、小児の感染症で一般にみられる症候のうち、発疹、咳、嘔吐を取り上げ、それらの症候がみられた小児に関して、どのような疾患が考えられるのか、家庭や保育・教育現場ではどのように接したらよいのか、診断面・治療面で特に注意しなければならないことは何か、感染対策や感染予防のための有効な方法は何かなど、などの点について、3名の講師の先生方にご講演いただき、その後はあらかじめ参加者の皆さんから頂戴していた質問を中心に、講師の先生方が質問にお答えするかたちで、パネルディスカッションを行いました。

前半の講演では、最初に慶應義塾大学小児科の新庄正宜先生から「発疹と感染症」というテーマで、麻疹、風疹、水痘をはじめとする沢山の発疹性疾患をご紹介いただきました。次に川崎医科大学小児科の尾内一信先生からは、「咳と感染症」をテーマに、長引く咳として副鼻腔炎、百日咳などの感染性咳嗽についてお話しいただいたほか、今夏話題となった中東呼吸器症候群(MERS)についても、トピックスとして解説していただきました。最後に、博慈会記念総合病院の田島剛先生から「嘔吐と感染症」をテーマとして、髄膜炎などの中枢神経系の感染症に伴う嘔吐、ノロウイルスやロタウイルスによる感染性胃腸炎に伴う嘔吐、ロタウイルスワクチンによる感染予防などのお話を伺いました。いずれも重要なポイントについて分かりやすくまとめられていて、日常生活に役立つ内容が多く含まれていたと思います。

後半のパネルディスカッションでは、感染症に罹った小児への対応や予防接種の問題等で日頃から皆さんが疑問に思っていること、悩んでいることについて、テーマ毎に整理しながら講師の先生方に解説していただきました。会場の皆さんから直接その場での質問をお受けする時間があまり取れなかったことについては、次回からの課題にしたいと思いますが、先生方からはとても丁寧に説明していただけたので、参加者の皆さんに、小児の感染症に関する貴

重な情報を提供することができたのではないかと確信しております。

小児の感染症を取り巻く環境は、予防接種の普及や治療の進歩により大きく変わりつつありますが、グローバル化が進む現代においては、未知の新興感染症や先進諸国では既にコントロールされたはずの再興感染症が流行するリスクを常に考えておく必要があります。私たち感染症の専門家は、感染症の予防・診断・治療に関する正しい知識や情報を、適切に社会に提供していく義務があり、そのための努力をこれからも続けていく所存でございます。



News Letter

研究助成金【小児科領域全般】

募集要項

- 1) 研究助成金：1件 200万円以内
- 2) 助成対象研究課題：
 - ① 新しい感染症や急性疾患の診断・治療に関する研究
 - ② 小児の難治疾患、慢性疾患の本態解明と治療に関する研究
 - ③ 生活習慣病の予防に関する研究
 - ④ 遺伝子治療など高度先進的医療の開発のための基礎的研究
 - ⑤ いじめ、虐待、拒食、不登校など子どもの心のケアや心身症に関する研究
 - ⑥ 生命倫理など社会的問題に関する研究
 - ⑦ 国際医療協力の基盤となる母子保健に関する研究
 - ⑧ その他、子どもの健康に関する研究
- 3) 助成対象者（下記①、②のいずれかに該当する者）：
 - ① 小児科の基礎的研究、臨床研究等に従事し、日本国籍を有する医師・研究者。
(平成27年12月31日時点で、50歳未満の者であること。
過去3年間に於いて当財団の研究助成金を受けていないこと。)
 - ② 助成対象研究課題をテーマとする研究会、シンポジウムの開催者。

応募方法

当財団の定める交付申請書(当財団URLよりダウンロード)に必要事項を記入し、右記宛に送付。

締切:平成27年12月2日(水)必着

優秀論文アワード

選考要項

アワードの概要

- ① 下記機関誌に掲載された、優れた研究論文を表彰する。
- ② 選考は各機関誌を発行する学会から優秀論文として推薦を受け、当財団の選考委員会が選考を行い、1件30万円、総計4件120万円を筆頭筆者へ授与する。
- ③ 平成27年12月31日時点で原則として、満40歳未満の執筆者を対象とする。

選考対象誌(平成27年1月～12月発行)

- ① 日本小児科学会機関誌
「日本小児科学会雑誌」、「Pediatrics International」から各1編
- ②-1) 日本小児神経学会機関誌
「脳と発達」、「Brain&Development」から各1編
- ②-2) 日本小児精神神経学会機関誌「小児の精神と神経」または日本小児心身医学会機関誌「子どもの心とからだ」から1編
※ ②-1)、②-2)の優秀論文はイーライリリーアワードとして表彰する。

選考結果発表

平成28年3月上旬に当財団ホームページ上で発表のうえ、平成28年第119回日本小児科学会学術集会会期中に表彰する。

ジャパンワクチン研究助成金 【感染症及び感染症予防ワクチン】

募集要項

- 1) 助成金額：1件 200万円以内
- 2) 助成対象研究課題：
 - ① 感染症の疫学と診断に関する研究
 - ② 感染症予防ワクチンの開発に関する研究
 - ③ 感染症予防ワクチンの有効性・安全性に関する研究
 - ④ 感染症予防ワクチンの国際的ネットワークに関する研究
- 3) 助成対象者：
日本国籍を有する小児科医師及びワクチンに関する研究者
・ 平成27年12月31日時点で、40歳未満の者。
・ 同一研究に対して過去に他から研究助成金を受けていないこと。
・ 過去3年間に於いて当財団の研究助成金を受けていないこと。

応募方法

当財団の定める交付申請書(当財団URLよりダウンロード)に必要事項を記入し、下記宛に送付。

締切:平成27年12月2日(水)必着

交付申請書・応募用紙の送付先及び照会先

公益財団法人 小児医学研究振興財団 事務局

〒110-0015 東京都台東区東上野3-32-2 廣瀬ビル4B

Tel:03-5818-2601 Fax:03-5818-2602

E-mail:shouni-iken@jfpedres.or.jp http://www.jfpedres.or.jp

留学体験記

日本医科大学 小児科講師

早川 潤



NIH NHLBI/Molecular and Clinical Hematology Branch

イーライリリー海外留学フェローシップ 【発達障害に関する研究】

募集要項

- 1) 海外留学奨学金：1件 180万円／総額 360万円
- 2) 対象研究：
発達障害に関する基礎的及び臨床的研究
(発達障害の定義：精神遅滞、学習障害、運動能力障害、コミュニケーション障害、広汎性発達障害、注意欠陥/多動性障害など)
- 3) 応募資格：
原則として、受賞後1年以内に出国し、海外の研究機関等において、一定期間(原則6ヶ月以内)研究や研修に従事できるもので、次の条件を満たしている者とする。
 - ① 日本国籍を有するわが国の大学、医療機関、研究機関に所属する小児科医師および小児医療研究者。
 - ② 具体的な研究または研修計画を提示できること。
 - ③ 研究終了後6ヶ月以内に研究報告書の提出ができること。
 - ④ 平成27年12月31日時点で40歳未満の者。
※応募は1施設から1名とする。【所属長(大学の場合は学部長)推薦】
※過去の受賞者の申請は不可。

応募方法

当財団の定める交付申請書(当財団URLよりダウンロード)に必要な事項を記入し、左記宛に送付。

締切：平成27年12月2日(水)必着

ジャパンワクチン海外留学フェローシップ 【感染症及び感染症予防ワクチンに関する研究】

募集要項

- 1) 海外留学奨学金：1件 350万円以内
- 2) 対象研究：
 - ① 感染症の疫学と診断に関する研究
 - ② 感染症予防ワクチンの開発に関する研究
 - ③ 感染症予防ワクチンの有効性・安全性に関する研究
 - ④ 感染症予防ワクチンの国際的ネットワークに関する研究
- 3) 応募資格：
原則として受賞後1年以内に出国し、海外の研究機関等において一定期間(原則1年以内)研究に従事できる者で、次の条件を満たしている者とする。
 - ① 日本国籍を有する小児科医師及びワクチンに関する研究者。
 - ② 具体的な研究又は研修計画を提示できること。
 - ③ 同一研究に対して過去に他から海外留学奨学金を受けていないこと。
 - ④ 研究終了後6ヶ月以内に研究報告書の提出ができること。
 - ⑤ 平成27年12月31日時点で40歳未満の者。
※応募には所属長(大学の場合は学部長)の推薦書を添付のこと
※過去の受賞者の申請は不可

応募方法

当財団の定める交付申請書(当財団URLよりダウンロード)に必要な事項を記入し、左記宛に送付。

締切：平成27年12月2日(水)必着

私は平成16年度ファイザー海外留学フェローシップのご援助のもと2004年7月から2008年9月までの四年間、米国・メリーランド州ベセスダにある米国国立衛生研究所(NIH), NIDDK, Molecular and Clinical Hematology Branchに留学させていただきました。

日本でも日本版NIHの日本医療研究開発機構(AMED)が発足しましたが、NIHは風光明媚なワシントンDC郊外のメリーランド州ベセスダに広大なメインキャンパスを持ち、20の研究所、国立医学図書館、情報テクノロジーセンター、クリニカルセンターを併設しています。当時はおよそ20000人の科学者・従業員が勤務し(日本人は約350人)、全米の科学研究の国家予算の20%をNIH内で使用し、のこり80%を全米の研究施設に配分しています。

自分の所属した研究室は、John Tisdale博士が独立して立ち上げた比較的新しいラボでした。ヘモグロビン異常症(鎌状赤血球症や地中海性貧血など)をターゲットにし、臨床では造血幹細胞移植の前処置をより最適にするプロトコルの開発を、基礎ではヘモグロビン異常症の遺伝子治療・iPS細胞の臨床応用を実施するための研究を行っていました。自分の担当はヒトに使用する予定の遺伝子治療ベクターの有効性と安全性をアカゲザルを使って評価することでした。すでにマウスで成功していたレトロウイルスベクターを改変し、サルやヒトの造血幹細胞へ遺伝子導入し、そのヘモグロビンの発現を見ます。ラボのメインプロジェクトであり、

成功すれば次はヒトへの応用となるので、ボスも大変力を入れていました。しかし、なかなか上手くいかず、4匹を治療し3年間フォローしましたが、最初の数ヶ月こそは少し治療ベクターの効果を認めたのですが、長期にはネガティブな結果でした。また安全性の評価はLAM-PCR法を使うのですが、当時はまだ手技が確立しておらず、日々試行錯誤で10000をこえるDNAサンプルの山と昼夜を問わず格闘し続けました。残念ながら我々のベクターでは治療の効果が無いという結論になりましたが、ボスには「日本人はこのような時は切腹するんだよな。」とまで言われました。

このように留学中の研究ではいつも苦労が絶えませんでした。私生活は充実し、ボスとラボメイトにも大変恵まれ、現地で研究者以外の日本人の方々とたくさん知り合うことができ、世界を広げることができました。休みには国立公園など各地を旅行できたのもいい思い出になりました。

早いもので帰国後すでに7年が経過してしまい、アメリカですごした日々がかなり風化してきてしまいました。「帰国して職場にもどると長い長い夢をみていたように感じるよ」と出国時にある先輩にいわれましたが、自分もまさにそうでした。

最後になりますが、今回の留学にご支援いただいた小児医学研究振興財団に、この場をかりて御礼を申し上げますとともに、次世代の若手研究者にも留学の機会を与えていただけたらと思います。



御 礼

賛助会員及び多くの協賛企業・寄付者の皆様のご支援により、今年度も昨年に引き続き市民公開講座を開催し、成功裡に終了することができました。引き続き、小児科医師・研究者の研究・留学費の支援及びアワードの授与を行い、今後も小児の医療・保健・福祉の向上に努めてまいります。皆様のご支援に心より御礼申し上げます。

当財団の賛助会費・寄附金は、確定申告の際、所得控除または税額控除を受けられます。

賛助会員(個人)

※敬称略 五十音順

赤司 俊二	衛藤 隆	金子 一成	嵯峨 六雄	竹村 司	早川依里子	丸山 剛志	横谷 進	芳野 信
安次嶺 馨	衛藤 義勝	金子堅一郎	酒井 規夫	田代 雅彦	早坂 清	丸山 博	横山 義正	脇口 宏
東 寛	遠藤 文夫	金原 洋治	坂田 和信	田中 篤	原 寿郎	三池 輝久	吉岡 和之	和田 和子
熱田 裕	小穴 慎二	加納 芳郎	佐久間弘子	田中 英高	原 正守	水谷 修紀	吉岡三恵子	渡邊 信雄
雨宮 伸	老田 礼子	鴨下 和子	佐々木 望	玉井 浩	春田 恒和	南沢 享	吉田 康子	渡辺 博
鮎沢 衛	尾内 一信	河 敬世	四方あかね	田村喜久子	日暮 眞	宮島 祐	吉田ゆかり	渡部 礼二
新垣 義夫	大賀 正一	河西 紀昭	重松 陽介	田村 正徳	平尾 敬男	宮代 英吉		
荒川 浩一	大川 洋二	神崎 晋	柴田瑠美子	千田 勝一	平松公三郎	麦島 秀雄		
有賀 正	大澤真木子	貴田岡節子	嶋田 泉司	長 和彦	廣瀬 伸一	村瀬 雄二		
有阪 治	太田 節雄	北中 幸子	志水 哲也	長 秀男	廣津 卓夫	村田 要一		
飯塚 幹夫	太田 孝男	北本 育子	清水 俊明	塚田 明子	福重淳一郎	元山 福祥		
五十嵐 隆	太田 秀臣	木野 稔	下条 直樹	辻 美代子	深澤 隆治	森 哲夫		
池本 博行	大塚 晨	木村 宏	下村 国寿	土屋 與之	福永 慶隆	森内 浩幸		
石井 正浩	大西 正純	楠田 聡	重里 敏子	堤 裕幸	藤井 達哉	森尾 友宏		
位田 忍	大野 耕策	楠原 浩一	白井 真美	鶴澤 正仁	藤枝 幹也	森川 昭廣		
井田 博幸	岡田 純一	工藤 充哉	白石裕比湖	寺井 勝	藤岡 雅司	森口 直彦		
井田 孔明	岡田 満	工藤 協志	白川 嘉継	寺門 道之	藤木 伴男	森下 秀子		
板橋家頭夫	岡部 一郎	久保 政勝	末延 聡一	寺田 春郎	藤田 弘子	守田 利貞		
市田 路子	岡本 博文	倉辻 忠俊	杉本 徹	寺本 貴英	藤野 滋	森田 友明		
逸見 睦心	小川 俊一	小池 健一	杉本 久和	戸苅 創	二村 真秀	森脇 浩一		
伊藤 悦朗	沖 潤一	小池 茂之	鈴木 敏雄	富沢 修一	船戸 正久	師井 敏裕		
伊藤 末志	小口 学	小泉 晶一	鈴木 康之	永井 崇雄	船曳 哲典	八木 信一		
伊藤 進	奥山眞紀子	小泉ひろみ	鈴木英太郎	永尾 尚子	舟本 仁一	安田 寛二		
伊藤 辰夫	小栗 絢子	河野 幸治	須磨崎 亮	永島 哲郎	平家 俊男	柳川 幸重		
伊藤 保彦	小田 慈	河野 陽一	清野 佳紀	中畑 龍俊	別所 文雄	柳澤 正義		
伊藤 雄平	小田切美知子	香美 祥二	関 秀俊	中原 智子	保坂シゲリ	藪内 弘		
稲垣 由子	小館 三郎	神山 潤	関根 孝司	成田 雅美	保科 弘毅	山内 穰滋		
稲葉 博士	小堂 欣彌	幸山 洋子	瀬島 斉	新津 直樹	細井 創	山川 毅		
猪股 弘明	小野 厚	興梠 ひで	千阪 治夫	西澤嘉四郎	堀川 玲子	山形 崇倫		
今井 秀人	緒林 誠	児玉 浩子	高島 俊夫	西間 三馨	前川 喜平	山口 清次		
岩田 敏	賀川 治美	後藤 彰子	高橋 協	新田 康郎	前多 治雄	山下 薫		
岩田 力	加治 正行	後藤 敦子	高橋 孝雄	布井 博幸	前田 美穂	山城雄一郎		
岩元 二郎	勝部 康弘	後藤 雄一	高橋 勉	橋本 和廣	正木 拓朗	山田 恭聖		
内田 正志	勝又 正孝	小林 繁一	滝田 順子	長谷川奉延	松井 陽	山野 恒一		
内田 祐子	加藤 達夫	小林 正夫	宅見 徹	羽田野爲夫	松尾 宣武	山本 圭子		
内山 聖	賀藤 均	駒田 美弘	竹内 義博	服部 元史	松尾 雅文	山本 威久		
畝井 和彦	加藤 誠	小山 典久	竹重 博子	花田 良二	松平 隆光	山脇 英範		
宇理須厚雄	加藤 正彦	小山 佳紀	武知 哲久	馬場 常嘉	松永 伸二	横田俊一郎		
江口 尚彦	加藤 陽子	斎藤 博久	竹広 茂子	濱本 邦洋	松林 正	横田 俊平		

賛助会員(法人)

※敬称略 五十音順

エーザイ株式会社
MSD株式会社
杏林製薬株式会社
Story of the tortoise株式会社
第一三共株式会社
大正富山医薬品株式会社
田辺三菱製薬株式会社
帝人ファーマ 株式会社
株式会社ナチュラルサイエンス
Meiji Seika ファルマ株式会社
医療社団法人 メディカル・プロ
和光堂株式会社

協賛企業

※敬称略 五十音順

アステラス製薬株式会社
MSD株式会社
ジャパンワクチン株式会社
武田薬品工業株式会社
中外製薬株式会社
大日本住友製薬株式会社
富山化学工業株式会社
日本イーライリリー株式会社
JCRファーマ株式会社
日本マクドナルド株式会社
ノボルディスクファーマ株式会社
マルホ株式会社
Meiji Seika ファルマ株式会社

事務局



公益財団法人 小児医学研究振興財団
JAPAN FOUNDATION FOR PEDIATRIC RESEARCH

〒110-0015 東京都台東区東上野3-32-2 廣瀬ビル4B
TEL (03) 5818-2601 / FAX (03) 5818-2602
e-mail: shouni-iken@jfpedres.or.jp

ホームページ

<http://www.jfpedres.or.jp/>

「子どもたちの世紀」について

News Letter題字の「子どもたちの世紀」は、日本小児科学会が創立百周年を迎えた当時の厚生大臣であられた小泉純一郎先生に揮毫をお願いしてご快諾頂き、総理大臣ご在任中にお書きいただいたものです。